

名古屋女子大学

創刊号

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education



ごあいさつ

学園長  
越原 一郎  
KOSHIHARA Ichiro

本学は、大正4年に創立の名古屋女学校を前身とし、昭和25年に名古屋女学院短期大学(のち名古屋女子大学短期大学部と改称)を開設、また、昭和39年には名古屋女子大学家政学部、さらに昭和63年には、文学部を設置し、今年、創立90周年を迎えました。

こうした本学、生生発展の中で、昭和37年に生活科学研究所が開設され、家政学、自然科学分野における研究成果を生み出してきました。一方、昭和47年には児童研究所を開設し、それを昭和54年に教育研究所と改称、地域に開かれた教育の総合研究機関と

して活躍を続けてきました。その後、平成13年には、生活科学研究所と教育研究所を総合科学研究所として統合、新しい出発をして現在に至っています。このように本学の研究所は、時代に応じて形を変えながら、理論と実践両面の研究に多大の成果を上げてきました。そして最近では、自然科学、文化、生活、教育、芸術等幅広い分野の学術的研究に活動を展開し、それぞれの研究の伸張が期待されています。

また、総合科学研究所の機関研究として、今年度から「創立者越原春子および女子教育に関する研究」が始まりました。学園としては、すでに70年史『春嵐』および春子伝『もえのぼる』が書き上げられていますが、今回の研究成果や、現在進行中の学園資料の整理・検討から、創立100周年に向けて、創立者越原春子像がさらに色濃く浮かび上がることが俟たれています。

このたび、「総合科学研究所だより」が発行されるにあたり、今後、本研究所の研究活動に一層の理解と支援が得られ、より多くの教員が共同研究に参画されることを望みつつ、一言ご挨拶とします。



専門の枠にとらわれず  
常に時代を洞察し、  
前向きに研究活動を促進

総合科学研究所長  
河村 瑞江  
KAWAMURA Mizue

総合科学研究所は平成13年に生活科学研究所と教育研究所を統合して発足し、5年が経過しました。本学は90周年、研究所としては43年の伝統を持ち、現在に至っています。これまで両研究所は自然科学の分野と教育の分野の2本柱を中心としてそれぞれ学術的、実践的な研究を推進してきました。総合科学研究所と改称したのちも、この流れの中で多岐にわたる研究活動が進められ、それらの成果は刊行物等で記録に残されていると共に社会的に評価を得てきました。

本学の発展に伴い、専門分野は多岐に広がり、研究分野が細分化されてきましたので、時代に即応した研究所の使命を果たすべく、事業内容の見直しをしています。

現在進められている機関研究「大学における効果的な授業法の研究」はH13年度より4年間に亘って進められ、「大学授業に関する実践研究」、「語学教育における効果的な授業法の開発」、そ

して「教養科目における授業法の研究」が今年度で2年目に入りました。現在、アンケート実施内容の検討、分析や研究会のほか、講演会の内容の検討と、授業改善などに向けて熱心に取り組んでいます。また、今年度から機関研究《創立者越原春子および女子教育に関する研究》では、共通テーマ「建学の精神と教育理念」のもとに個々の研究テーマがスタートしました。更にプロジェクト研究の積極的な研究活動が進められており、それらの研究成果も大いに期待しています。「幼児の才能開発」「中学生の学力向上」の教育に関する研究は長い歴史をもち、6月に行われた中学の研究会で126回を数えました。時代とともに研究内容を変え成果を挙げています。ただしこれについては私学の特色を生かすべく中、高、大の一貫教育を促進する必要性から、研究のあり方を再検討することも課題となっています。

研究所は、機関として専門の枠にとらわれず学術的かつ実践的な共同研究を促進し、創造と学問の進歩に合わせて地域文化に貢献することを目的としています。常に時代を洞察し、前向きに研究活動を促進したいと思います。これまで研究所の発展にご尽力いただきました先人たちに感謝するとともに、目標達成に向けて内容の充実に努力する所存です。

今年度から、「研究所だより」を発行し事業内容および所員(常勤の教員)の活動等を紹介していくことになりました。皆様の暖かいご支援をよろしくお願いいたします。

plan

今年度の事業計画

plan

1

機関研究 ●●●●

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

◎堀出 稔・伊藤 太郎・木原 貴子・遠山 佳治・丸山 竜平・村上 哲生・吉村 智恵子・依岡 道子

本研究の目的は、機関研究の趣旨に明記されているように、建学の精神に基づき本学の伝統と時代の要請を見極め、女子大学の積極的な存在の意義を明確にすると共に、創立者の建学の精神に立ち帰り、有用な女子高等教育機関としての将来像を考察することにあります。

本研究の期間は、平成17年から18年の2か年とし、対象となる研究テーマは、創立者に関する研究および女子教育に関する研究です。募集の結果9名の応募がありました。その各研究テーマは本機関研究の主テーマに沿ってはいましたが、最初は各研究分野の互いの関連性は薄いものでした。そこで、関連性を持たせるため共通の副テーマを見つけることになりました。検討した結果、各研究課題を括る副テーマを「建学の精神と教育理念」とし、主テーマに関連させました。その方法により個人・共同合わせて8つの研究テーマ（創立者と建学の精神など）を追求することに決定しました。また、創立者への共通認識を深めるため、『春嵐』と『もえのぼる』を読み、意見交換を行いました。

今年度は個々の研究を深めることを目標としています。また、創立者に直接接した方々へのインタビューも行います。平成18年度は主テーマに沿って個人研究を互いに検討し、集大成する予定をしています。 (文責:堀出 稔)

2

プロジェクト研究 ●●●●

日本における共生概念の変遷  
～自然および社会理解の両面から～

◎村上 哲生・大森 北義・福田 靖子・真鍋 顕久・丸山 竜平・三谷 嘉明

我国では、「共生」という言葉は、異種の生物間の相互扶助 (symbiosis) の意味で使われてきました。さらに、近年では、生物間の関係を人間関係に敷衍して、社会生活において日常的に使われる例も見受けられるようになってきたようです。このように「共生」概念は、生物学的な枠組みで使われていますが、本来、日本における「共生」という言葉の使用は仏教用語としてさらに起源を遡ることができ、広範囲の概念を含むものと言われています。本研究は、多層的な意味を含む「共生」概念を対象とし、自然科学、また人文科学の両面から、我国におけるその概念の変遷と社会の対応について検討することを目的とするものです。従来の共生概念の研究は、自然科学主導のものでしたが、本研究においては、文理融合型の学際的な研究体制により、多面的な視点からの理解を目指します。

(文責:村上 哲生)

3

プロジェクト研究 ●●●●

音声を活用したWebCTによる音楽学習  
支援コンテンツ作成・運用とその効果について

◎小林 田鶴子・伊藤 充子・丸山 竜平

本学ではWebCTを活用して授業の補完や学科での掲示板、国家試験対策等が行われています。しかし、その内容は文字を中心としたものです。そこで、本研究では音声(音楽)が含まれるコンテンツを作成し、それを児童教育学科の「音楽理論」受講生に閲覧させたりテストを実施したりすることによって、音声の効果的な活用について検討するものです。

本研究の計画は、まず武蔵野短期大学などのe-Learningの先行事例研究を行い、それを基にコンテンツを作成します。その後、運用と評価の上、コンテンツの手直しを行い、運用と再評価を経て仕上げます。このシステムの活用によって、インターネットでの自宅学習や、個別対応などのメリットを活かし、学生へのきめ細い指導が期待できます。また、音声データは今後、語学教育への応用が見込まれます。

尚、これらの結果は「PCカンファレンス2005」や「全日本音楽教育研究会」で発表いたします。 (文責:小林 田鶴子)

4

機関研究 ●●●●

「幼児の才能開発に関する研究」～豊かな感性や表現力を育むための実践～

◎幼児保育研究グループ

子どもたちが、生活の中で感じたり考えたりしたことを様々な形で表現するためには、実体験がとても大切な意味をもち、その中から子どもたちがイメージし、様々な表現をするためには環境や教師の援助がたいへん影響すると考えられます。

そこで、遊びをはじめとし、幼稚園の生活の中で子どもたちが自ら感じ考えたことを教師が共に感じ、そのことを土台としていろいろな表現へと導いていくこと、さらにはそのための環境構成の中で子どもが自ら感じ発見していく過程をとらえ、教師がどのように援助していくかを実践の中から探っていきたいと考えています。 (文責:森岡ととき子)



年少組「表現遊び」

心理教育相談室

幼児から児童までの心理的な問題(子どもの気になる性格や行動・くせ、親子関係の悩み、思春期、青年期のこころの問題ほか)についてご相談に応じるなど、地域に役立つ活動をしていきたいと考えています。

<相談時間>

月曜日 13:00～16:00

金曜日 10:00～16:00

土曜日 10:00～12:00

<完全予約制>

受付時間:月～金曜日

9:00～17:00

予約電話

052-801-7470(直)

## 5

機関研究 ● ● ● ●

## 「大学における効果的な授業法の研究3」

～教養科目(人文・社会・自然)における授業法の開発～

◎遠山 佳治・小澤 教子・白井 靖敏・末田 香里・谷口 富士夫・辻 和良・服部 幹雄・宮原 悟・村上 哲生・森屋 裕治・(加藤 久乃)

本研究で、昨年度より進めてきました研究活動の中から、研究者メンバー全員にて読み意見交換をした本と参加した研究会から、授業改善に関わる具体的事例を紹介します。

\* 浅野誠『授業のワザ一挙公開 大学生生き残りを突破する授業づくり』(大月書店)2002年

\* 木野茂『大学授業改善の手引き 双方向型授業への誘い』(ナカニシヤ出版)2005年

ブランド大学をモデルにする教育論を批判し、一方通行的講義から対話型協同型授業へ、学生と教師との共同創造型授業、学生と一緒に作る双方向型授業の提唱をしています。そして、授業改善のさまざまなワザを提供しています。

とくに浅野氏は、グループ編成を行なう手段として、雰囲気づくりのためゲームを導入することを薦めています。そこで紹介されていた「自己紹介・他者発見ビンゴゲーム」は、自分と同質・異質項目を教師側が設定し、そこに参加者の中から、数人ずつ探すというものです。短大生生活学科食生活専攻の新生オリエンテーションにて実施し、効果を得ました。その他、授業中に作業過程を組み込むこと、学生たちを討論に集中させるまでの手立て(紙飛行機・トランプ式・短冊式・肩たたき・ポスターの討論)の重要性が指摘されています。ゲーム性を帯びた各種のワザは、教師の性格や授業内容・形態によって使用できないものもあると思われますが、今後の参考にはなるかと思われます。

\* 一斉授業で個別学習をめざす授業形式—セルフスタディ授業の紹介

これは、3月22～23日に行なわれました第11回大学教育研究フォーラム(京都大学)にて、聖カタリナ大学平野信喜先生が発表されたものです。一斉授業ができない現状をどう打開するかという問題意識で、編み出されたのがこの「一斉授業での個別授業」であったそうです。まず、従来教師が出欠席を取っていたのを止め、学生が出欠席を取り、授業ごとに授業態度自己評価採点を提出させます。前提として教師は学習目標を提示するものの、あくまで学生が目標を決めるべきものと考えています。論理的な試験問題の作成の過程を教師は教え、問題作成の基準を教師と学生が合意した上で、学生が試験問題を作成し、採点の自己申告をします。実践例の報告ではありましたが、まだまだ課題も山積みのように感じました。しかしながら、「教師は授業の主体者であり、学生は勉強の主体者である。」という当り前の事を思い起こさせられた感がありました。

本の紹介



## 6

機関研究 ● ● ● ●

## 「中学生の学力向上に関する研究」

「人間中心主義のカリキュラムの追究～新6つの学習のさらなる創造に向けて～」

## 第126回研究会(6/15)

◎中学校学力向上研究グループ

研究テーマ「生徒の科学的な見方や考え方を引き出す発問のあり方を求めて」

公開授業「理科:植物の世界」中等部1年 坂井健吾 教諭

ご参加いただきました先生方の中からお二人のコメントを紹介します。

## ●杉山章教授(短期大学部栄養科)

私も小学校の特別授業などに参加することがありますので、児童の興味を引くための導入部や観察への目を向けるテクニックなど大変参考になりました。

## ●D.Jarrell教授(文学部国際言語表現学科)

自分の分野と違っていても、研究会に参加する意味が何かあると思い参加しました。公開授業では、先生が理科嫌いの生徒を考慮し、説明から始めるのではなく、少人数グループで植物の分類について生徒の発見から進めていく授業でした。自分も間接的に植物の分類が生物学において重要な部分を占めていることに気づくことができました。

昭和54年に発足したこの研究会は名女大中学生の学力の一層の向上を目指し、常に中学校教育活性化の後押しをしてきました。

21世紀を迎え、今後は『新生NEW名女』の名のもと中・高・大一貫教育など新しい教育の創造をめざした研究を模索していきたいと考えています。



第126回研究会 公開授業

## 【今後の研究会の予定】

10/27(木) 第127回

公開授業「社会」(岡田有希子 教諭)

11/22(火) 第128回

公開授業「数学」(小林雄介 教諭)

2月中旬 予定 第23回研究発表会

研究授業「理科」(野中知里 教諭)



## 演 題

## 学生が“動く”コミュニケーションと教育コーチング

日 時 9/20 (火) 13:30～15:30

場 所 汐路学舎 南4号館 105教室



プロフェッショナルコーチ  
佐々木 宏  
SASAKI Hiroshi



POINT 1

## 説教を説得に変える

「1対多」の場面で活用できる技術として、情報発信者の目線ではなく、受信者の目線で語れるコミュニケーション技術を習得します。



POINT 2

## 学生の意欲を向上させる、教育コーチング

コーチングのスキルを体感していただけます。学生の潜在能力を引き出し、目標達成の支援をするコーチング！「1対1」のコミュニケーションが前提となるコーチングは、損路支援やゼミ形式の指導などでは、大いに活用できるスキルです。それを「1対多」という授業場面においてどのように活用できるか、その可能性について参加者の皆さまと考えていきます。



講師の著書

## 今年度運営委員の抱負



村上 哲生  
MURAKAMI Tetsuo  
(家政学部)

昨年度研究所の主任を拝命したご縁で、引き続き運営委員として研究所の諸活動に協力することになりました。大学の社会的な責任として、研究と教育は車の両輪にも例えられる不可分のものであることは言うまでもありません。研究と教育の何れも、基本的には、教員個人の能力に依存するものです。積極的な意見の具申と公平な研究所運営により、教員各自の資質の向上に尽力するつもりです。



小町谷 寿子  
KOMACHIYA Hisako  
(家政学部)

私は、衣生活論や被服構成実習など被服分野の授業を担当しています。衣生活全般を対象とし、乳幼児や高齢者の身体特性に応じた快適な被服を考えるなど日常生活と密接な教育分野です。近年、中・高等学校では関連の単元が減少傾向にあるため、家庭科教員養成やアパレル産業に就職し社会に貢献する人材の育成には、これまで以上に効果的な授業が必要です。総合科学研究所の教育研究活動を通じ授業改善を目指します。



委員長 遠山 佳治  
TOHYAMA Yoshitaru  
(短期大学部)

総合科学研究所の運営委員長を2年連続で勤めさせていただき、東奔西走しております。今年度は、まず教育コーチングという新しい視点からの講演会をぜひ成功させ、また教育研究の現場から、中高大の一貫教育の繋がりを強める体制づくりに一歩一歩尽力していきたいと思っています。徳川家康の遺訓(ただし作者は不明)として有名な「人生は重き荷を負ひて、遠き道を行くが如し」のように…。

積極的に自ら立候補したわけではありませんが、お引受けした以上、研究所がより良い形で運営されるよう、微力を尽くしたいと思います。研究所と銘打った組織なので、どこに出しても恥ずかしくない研究業績が発表され、その蓄積がなければなりません。もちろん、これまでも多くの先生方の努力があって今の姿が築かれてきているのですが、さらなる発展をめざし、理想を追求したいものです。



林 和利  
HAYASHI Kazutoshi  
(文学部)

短期大学部生活学科生活情報専攻所属の川田博美です。ITの進展による情報流通変革期にある今日、大学の研究所もそのあり方や地域社会などへの成果の還元法などの見直しが進め



川田 博美  
KAWADA Hiroshi  
(短期大学部)

れている時期を迎えていると考えられます。広く社会から求められる研究テーマの検討を進めつつ、本研究所の成果を広く学外の市民の皆さんにも知っていただくべく、微力ながら情報発信の展開に寄与できればと考えています。よろしくお願いいたします。

## 編集後記

ここに、総合科学研究所だより創刊号を発行することができました。執筆いただきました越原一郎学園長、運営委員・共同研究メンバーの先生方、および編集にご協力いただきました関係者の皆様にご感謝申し上げます。

平成17年度、本研究所には、所長・河村瑞江、主任・渋谷寿、助手・越原もゆる、職員・加藤久乃の4名が所属しています。所長以下、新体制のもとで協力して総合科学研究所としての使命を遂行してまいります。なお、運営は5名の運営委員の先生方と運営委員会の中で議論を重ねながら、幅広い共同研究活動等を企画展開していきます。大きく変わる社会の中で、総合科学研究所も長い歴史的伝統を尊重しながらも、時代に応じた変化が求められているように感じています。

名古屋女子大学総合科学研究所だよりは、年2回の発行を予定しています。より良い紙面づくりのために、皆様のご協力をお願いいたします。

総合科学研究所